

図書館だより

Library News No.56

Nara National College of Technology

2002年11月 奈良工業高等専門学校図書館発行



4I 青山 瑠美さん

目 次

巻頭言「国際会議に参加して」……………	2	図書館をもっと利用しやすく アンケート結果より……………	13
図書館探検と発見……………	3	読書の秋・芸術の秋・行楽の秋……………	14
高専生に薦める……………	4	最近の書棚から……………	14
若者とケータイ……………	6	読書週間行事について……………	16
心に残る一冊の本 — その12 —……………	8		
学生の広場……………	10		

6月末から7月中旬にかけて2つの国際会議に出席した。合成金属の科学と工学（ICSM2002）に関するものと、もう一つは誘電液体（ICDL 2002）に関する会議である。後者の会議は別の機会があれば触れたいと思っている。今回の合成金属に関する国際会議は、お隣の中国・上海で開催されることもあって、初めて専攻科生2年「中間勇二」君を連れて行くことができた。大学では先生と一緒に院生が出席して発表することは日常茶飯事のことであり、さほど珍しくもないが、高専で学生を国際会議に参加させることは、私のささやかな夢の一つでもあった。（本校でも既に何人かの専攻科生が外国での国際会議に出席し、講演発表しているとは聞いている。）この国際会議には、2000年にノーベル化学賞を受賞された白川英樹博士を始め、米国のマックダイアミッド博士及びヒーガ教授の3名が出席され、特別講演を行うなど大変盛況であった。参加者は1200名弱にのぼり、日本と中国が全体の6割を占め、参加者数のトップは日本であった。上海は日本に近いとはいえ、約十倍の人口を抱えている国を抜き、必ずしも科学者等の数と人口は比例しないが、一番になるとは驚きであり参加者の発表があったとき、会場から「おっ」と云うどよめきが起こった。さらに本会議は、若い研究者が半分強を占め非常に活気があり、この分野のダイナミックな動きを肌で感じると同時に、参加している同胞の顔をみると日本の閉塞感が嘘のようでもあった。

さて、会議の合間に中間君を連れて蘇州への半日ツアーに参加した。水の都として知られる蘇州には、有名な庭園や寺がある。高校のとき漢詩の時間に、担任でもあったS先生からよく聞かされていた。このような影響もあってか、中国に行ったら耳に馴染んだ響きの良い蘇州へまず訪れたいと思っていた。中国人のガイドは、英語が堪能な院生で、ある寺に近づくにつれて、しきりにChinese Poemがどうかこうとかと喋り、Poemを知っているかと聞く。面倒なので適当に返答をしておいた。大勢の中国観光客に混じって、境内に入るまでその寺が、漢詩で習った彼の寒山寺だとは夢にも思わなかったからである。

若い諸君等は、漢詩や漢文を僅かしか習わないと思うが、この寒山寺には古くから日本人の間で愛誦（あいしょう）されている詩がある。唐代の詩人で張継（ちょうけい）が詠んだ「楓橋夜泊」で、「月落ち鳥啼いて霜天に満つ・・・」で始まる漢詩である。寺内の石碑には、この詩が彫られており、石碑を見て初めて彼女の云っていたことが理解できた。詩を日本語で発音するとこうなると読んで聞かせていると、傍でいたフランス人研究者が日本の高校生は、今でも中国語を習っているのかと尋ねられた。少しだけ昔の漢文や漢詩を習っているが、会話とは直接つながらないので全く喋ることが出来ず、また理解も出来ないと云ったら怪訝な顔をされた。現在は英語に力点が置かれ、多くの時間が割かれて学習している旨の話をした後、こと会話等になると我々は殆ど壊滅状態にあると云ったら妙に納得をしてくれた。ともあれ今回の旅で中間君もまた英語、特に会話の重要性を身に染みて感じてくれたことと思う。

ところで余談ではあるが、この寺の名に由来した僧、寒山に関する「寒山拾得」という森鷗外の短編がある。興味があれば是非読んでいただきたい。

図書館探検と発見

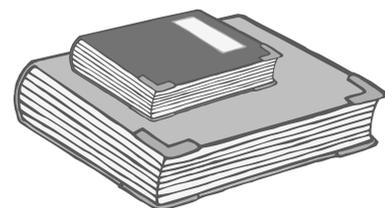
非常勤講師 角 克明

いままでに、何かを調べようと図書館へ行ったものの、目的の本が所蔵されていなかった経験はないだろうか。こんなにたくさん本があるのに、どうして意中の本がないのか！と。逆に、書架を丹念に調べたり、検索システムでリストアップしているうちに、思いがけない本に出会うこともある。ここに、こんな本があったのか！と。このような経験を幾度となく積み重ねながら、図書館探検が進む。新たな探検は、私たちに何らかの発見を与えてくれる。やがて、探検と発見で満たされてくると、図書館の常連学徒となる。こうなると、書架の配置、「本のならび」や「書名」などが頭にすぐ浮ぶようになる。私も大学院時代、自由に入室できた書庫の 290番台（地理の分野）や 680番台（交通の分野）など、自分の研究分野や関連分野の書架は把握していた。書庫へ入室できなくなって久しいいまなお、意中の本が所蔵される「定位置」まで頭に浮ぶのだが、めんどろな手続きを余儀なくされ、もどかしい思いをしている。

さて、図書館探検でおもしろいのは、冒頭に書いた「この本がない」「こんな本があった」という発見が連続するときである。もちろん、この発見は単なる本の発見だけでなく、その内容の享受によるところが大きい。しかしこう書くと、みつけた本を最初から終わりまで読まなくてはいけないのかと思われがちであるが、私は通読できないのなら、それでよいと思う。関心がわいた断片的な部分からの発見をみすみす逃してはならない。そのとき、無理に読もうとしなくても、その関心ある分野を開拓してゆくうちに、必ずその本との再会を果たすであろうから…。

図書館探検は常連になっても終わらない。図書を増備や他の図書館への依頼・照会など、発見へのネットワークはつきない。また、時間とともに私たちは成長するので、一度読んだ本でも時間をおいて読み返すと再発見をもたらすことが少なくない。そういう意味では、私の担当クラスで編集した『地理報告』も捨てたものではない。いまのところ、1996年度（1997年発行）から毎年刊行しており、図書館には第3輯（1998年度）以降、のべ4輯11分冊、およそ450をこえる地理的発見が収録される（2003年1月に第7輯・4分冊が刊行予定）。これを機会に、多くの方々にご一読をお願いしたいし、当該年次に「夏休みレポート」として取り組んだ諸君には、ぜひ読み返してほしい。きっと、ここにも再発見が待ち受けているにちがいない。

かけがえのない青春時代、探検に出ようという姿勢が図書館探検の余地をつくりだし、新たな発見をもたらす。そこに、限りない期待をよせたい。



高専生に薦める○○○

メタルカラーの時代

～もうひとつの「プロジェクト“x”」～

山根 一眞著 小学館

電気工学科 寺西 大

「プロジェクトXは確かに面白いんですけど、ビデオやし見る時間がなあ。」「本になったやつもあるんやが、本は堅苦しいから読む気がせんわ。」という人にお勧めなのが、この「メタルカラーの時代」である。この本は、元々はオジサンたちが良く読んでいた「週刊ポスト」で連載されていた、「ビジネス生モノ市場」と「新マエストロ列伝」の2コーナーを本としてまとめたものである。その内容は著者であるノンフィクション作家、山根一眞氏と、「モノづくり」にまつわる様々なメーカーの中堅クラスの人々とのインタビューの形式でつづられているため、気楽に読める。週刊誌の1コーナーであるため、1つのインタビューのボリュームも7～8ページ程度であり、空いた時間を利用して少しずつ読めるようになっているのもありがたい。

インタビューの対象となっている人々の業種はまさに多岐にわたっており、特に、インフラストラクチャの根幹に関わっているが、通常は隠れて目に見えない、あるいは我々一般人が見落としがちな部分に関わる部分を作った人々に重点的に焦点が当たっているところも面白い。「プロジェクトX」がメジャーどころの「モノづくり」の開発秘話（悲話？）なのに対して、こちらはちょっとマイナーだけれど、いわば「現代版“縁の下”の力持ち」とその現状」といったところか。いくつか例を挙げると、大きなところでは100万ボルト送電線の空中架線工事の話、明石大橋などの巨大な橋をミリ制度で仕上げる話、石油タンク内部の1000トンのゴミ掃除の話など。小さいところでは1センチ角に200万個の画素を持つCCDの話、微小ネジ6000種類同時生産の話など。ちょっと変わったところで

は古紙回収業者が見た価値観の変化、同時通訳者の「脳の体力」訓練法、天然ガス転換部隊の大奮戦など。いずれも、普段は気がつかないが、言われてみればどうやってるんだろう的なところにターゲットを絞った話が盛りだくさんである。

話の内容は、やはり「モノづくり」のプロセスが中心となるが、堅苦しい雰囲気ではなく、意外なところに意外な技術が生かされていたりして、笑ってしまうところもあつたり、山根氏のオヤジギャグ的なツッコミがあつたりで、読んでいて肩が凝らない。

本校の図書館閲覧室に単行本版と文庫本版の両方があるので、まとめて読みたい人は単行本版を、通学時間とかの空いたときに読みたい人は持ち運びに便利な文庫本版をお勧めする。

生命と場所

最も身近な科学“生命科学”

清水 博著 NTT出版

電子制御工学科 矢野 順彦

生命の優れた機能・機構を模倣（真似）しようという考えは、昔から研究者の知的好奇心を駆り立ててきました。ヒトを例にとると、二足で歩行し、手を使うことでいろいろな作業を行うことができます。なぜ倒れずに歩くことができるのか、なぜ卵を割らずにつかむことができるのか、このヒトの手や足の動作を可能しているメカニズム（しくみ）には非常に興味深いものです。そのメカニズムを解き明かそうというのが、生命科学の目的の一つでもあります。

手や足の動きを行う上で最も重要な役割を果たしている筋の構造を見ると、筋繊維と呼ばれる筋細胞からなり、またその筋繊維は筋原繊維から構成されています。さらに筋原繊維はサルコメアと一般に呼ばれる筋節からできています。

筋節には2種類の繊維状のタンパク質（アクチンとミオシン）があります。この2つのタンパク質分子が、ATP（アデノシン三リン酸）という物質を燃料にして、伸び縮みする望遠鏡のように横滑りすることで筋に収縮や弛緩（しかん）をさせています。その筋を制御する神経系、またその神経系を統制する脳の運動制御機能(小脳にある)とが階層的に重なって手や足は動きまわります。つまり筋は、多数の要素が密接に絡み合っていて巧みな制御系を構成しているのです。

そのような制御系を人工的に実現しようと世界の各地で研究がされていますが、収縮の速度、重量、柔軟性、制御のしやすさについて問題が残されており、研究の余地はまだあります。それだけに生命のメカニズムを解き明かすのは非常に奥深く難しいとも言われています。

「生命と場所～創造する生命の原理～」は、筋のように多数の要素が集まるとどのような機能が生まれるか、さまざまな視点から追求した生命科学の入門書です。低学年の学生にとっては難しい内容が含まれているかもしれませんが、最も身近な自分自身の科学である生命科学の奥深さを少しでも感じてほしいと思います。

マッチ箱の脳 (AI)

森川 幸人著 新紀元社

電情報工学科 山口 智浩

私は人工知能 (AI) を研究しているが、研究室の学生に、これAIがわかりやすく説明されていますよ、と薦められたのが「マッチ箱のAI」である。誰が遊んでも同じような解き方になる固定シナリオや、用意された動作やセリフを再生するだけのゲームではなく、プレイヤーの解き方に応じて戦略を変えたり、徐々に賢くなっていくキャラクターが自動的に動くゲームを作りたい。この本は、著者がAI手法を用いて上述のゲームを開発した経験を元に、遺伝的アルゴリズム (GA) やニューラルネットワーク (NN) がゲーム中でどんな風に使われているかが、マッチ箱モデルによる手計算で説明されている。

1章のテーマは、RPGゲームにおいてプレイヤーとのバトルという環境に対し、うまく適応できるように自身の力で進化していくモンスターの作り方である。ゲームの相手は強すぎても弱すぎてもダメである。プレイヤーと適切なレベルで競争しつづけるプログラムとして、まず前半で進化のしくみを計算するGAを紹介し、後半でGAを使った「RPGモンスターのデータを作る」シミュレーションの方法が説明される。2章のテーマは、学習能力を持つキャラクター（プログラム）をプレイヤーがいかにか育てるか、という育成ゲームにおける、プレイヤーとキャラクターとの協調である。

まず前半では、例題と模範解答を与えると、両者の組合せを学習するNNモデルが説明される。そして後半では、NNを用いた学習機能をもつキャラクターの育成ゲームの概要が紹介される。このゲームの面白さは、キャラクターが直面する状況に応じてプレイヤーが教えることを通して、キャラクターが学習していく過程をプレイヤーが楽しむことにある。一方、この育成型ゲームのデザインの本質は、いかにか育て方の多様性を許すかにある。

3章以降では、学習や進化計算に関する手法が簡単に紹介されているが、私が最も興味深かったのは、5章後半の完全自立型NNの一節である。自動化といっても、GAによる解の進化では解の良さを採点する評価知識が、NNによる学習では、例題と正解の教示が必要である。そこで解生成NNと生成解の自己採点NN両方をGAで同時に進化させる自己完結型AIが紹介される。尚、「マッチ箱の脳」WEB版[1]では、AIの有名人である松原仁教授との対談が掲載されている。



若者とケータイ

物質化学工学科 井口 高行

この夏、最近の若者に関係する次の3冊を読みました。

「若者の法則」

香山 リカ著 岩波新書 (2002年4月)

「若者はなぜ『繋がり』たがるか」

武田 徹著 PHP研究所 (2002年1月)

「メール私語の登場」

島田 博司著 玉川大学出版部 (2002年4月)

結論的には、いずれも学生諸君に特に読むことを薦められる図書ではありませんでしたが、私にはいまの若者の実像をある程度垣間見ることができました。これらを参考にまとめてみました。私は学校で学生相談員をしています。カウンセラーです。あと数年で定年の私が若い皆さんと打ち解けて話をするには、かなり無理を感じるときがあります。皆さんがもし4, 5年生なら2, 3歳しか歳の差のない部活の後輩を「いまの若い者は……」と感じたことが、きっとあったと思います。

十年くらい以前になりますが、当時五年生の女子学生が二年生の女子との間で対立したことがありました。その理由は低学年女子の更衣室の使い方が自分達本位で、以前からの決まりを守らず、整理が悪いことが上級生には不満だったのです。五年生が私に不満を訴えてきて、自分の意とするところを話すだけ話して、少しは気が収まったようでした。

この女子学生も今では二児の母親です。彼女の子どもが思春期を迎える頃には親子の考えは少なからず合わなくてあたりまえだと思いませんか。

世間でよくあるように、子どもが何か問題を

起こしたときに大抵の親は「うちの子に限って……」と言います。こどもの方は親に「何も分ってないくせに……」と言う場合が多いようです。そうかと思えば思春期に親子ゲンを体験できなくて、二十歳を過ぎても自立出来ない子どもも多くなってきているから、心の問題は本当に複雑です。

母親に勉強しなさいと言われると、こどもの方は親の願いとは逆になぜか反感を持つのが普通ですが、おとなしく従うよい子に後々問題が残ることが多いのも、心の問題の複雑なところでしょう。

先生に対しても、先生は自分達に定期的に教えてくれる大人であり、さらに成績や進級を決定する権利を持つ大人であって、多くの場合は決して打ち解ける間柄ではないでしょう。

若者が打ち解けて話してくれるには、いまの若者を少しでも理解し、私の方から若者に近づくのがよさそうです。

本当に「若者の法則」があれば簡単ですが、もちろんそのような都合のよい法則はありません。精神科医の香山リカが数々の若者行動を「確かな自分をつかみたい」の法則とか、「似たものどうしなごみたい」の法則など6つの法則に分類しています。分類はともかくとして、随所にみられた著者の豊富な経験が私には役に立ちました。

「いまの若者の行動はケータイを抜きにしては語れない。ケータイにより若者の人付き合いは決定的に変わった」と言われています。私の世代では大事な話は電話で済ませず、実際に顔を見て話すのが当たり前でした。いまの若者は大事な話は電話も使わず、ケータイのメールというカタチで送ってほしいと思っている。大事な話だからこそメールという最も信頼できる、確かなもので送って欲しいようです(若者の法則)。ここではメール中心で使う場合を「ケータイ」と呼び、通話する場合を「携帯電話」と大まかに区別して表現しています。ケータイは個人専用の情報ボックスでメールを千件も保存できる機種もあります。記録として残るから確か

だと考えるのかもしれませんが。公衆電話が少なくなつて、私が携帯電話を便利に利用していたこの二年ほどの間に、若者の関心はもっぱらケータイのメールに移っていたのです。若者がかさむ通話料金に支出するために、若者の消費活動が冷え込んだとの分析があるほどです。それでも一層若者を惹きつけるべくケータイは次々と進化しています。皆さんが生まれる前の、大昔の物語「君の名は」では、偶然知り合った二人に以降すれ違いがあつて、なかなかめぐり合えないのが物語を面白くしていました。

この文を書くために試みに持ってみたケータイではGPSを利用して地図上に自分が今居る位置を相手に知らせることが出来るし、もちろんその逆も可能なので、すれ違いなど有り得ません。

いまの若者は自信を喪失していると、しばしば言われます。大学でチョットした相談に先生を部屋まで訪ねるとき、二人づれで来るのがよくあります。他にも同じような例を聞いたことはあります。「類は友を呼ぶ」し、逆に気の合わない者とは行動を共にしないのは、今に始まったことでもないが、この点でもケータイは非常に便利に使われています。固定電話でもそうですが、発信元番号が着信と同時に通知されます。携帯電話で番号を見てから気に入った相手以外の電話には答えない（番通選択）。

さらに一歩進んで携帯電話はいつも留守電状態にし、メッセージを残してくれた中から相手を選択して自分から掛ける。こうすると「他者」は排除されるので、仲間だけで繋がって一種の共同体が形成されることになる。以降はメールで連絡し合います。これを「互いに傷つけない人々に丁度よい無葛藤の淡い通信手段」と呼んだ精神科医（大平健）がいます。

近頃必ずしも毎日家に帰らない高校生がいても、それほど心配しない親も多くなつたとか。なぜなら携帯電話でいつでも連絡が付くからだそうです。必要がなければ家族と一緒に居なくてよいのでしょうか。今のこどもには自分が親に愛されていることに気付かなくなつてきてい

る場合も多いといわれています。携帯電話が親子関係を希薄にするようなことがあつてはいけないように思います。

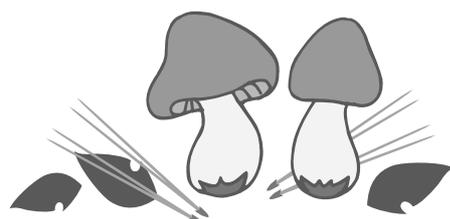
最後に「メール私語の登場」の中から引用します。この調査は関西の私立、国立大学7校900名ほどで行われました。大学授業風景に異変が起こりつつあると書かれてありました。本校でもこのかすかな兆しに気付いておられる先生方がおられるかもしれません。以前の教室内の私語が沈静化し、代わって何人かの学生がケータイメールに心を奪われていると述べています。教室を暗くしてビデオなどを見るとき、あちこちでケータイの液晶画面が浮かび上がるといいます。メール私語の相手は教室内、学内、学外かもしれません。

本校でもこの問題の圏外にすることが、不可能なことは目に見えています。現に学生諸君から腕時計がほとんど消えて、時間を見るのは携帯電話で間に合わせていますし、マナーモードにするのを忘れていた学生に「オイオイ」と感じた経験もすでに少なからずあつたのではないのでしょうか。

これに対処するのに、学生諸君を授業に引き付けられればよいと言うのは簡単ですが、教師が面白いと思うことと学生諸君が面白いと感じることの間にギャップがあり過ぎるような気がしています。これも若者を理解できていないからでしょうか。

限られたスペースで説明不足もあるようですし、もっと他の使い方をしてる方もいるでしょう。

ただし、新聞などで報道されるような使い方については省きました。



あなたに薦めたい

心に残る一冊の本 — その12 —

「部分と全体」

ベルナー・ハイゼンベルグ著

一般教科 土岐 進

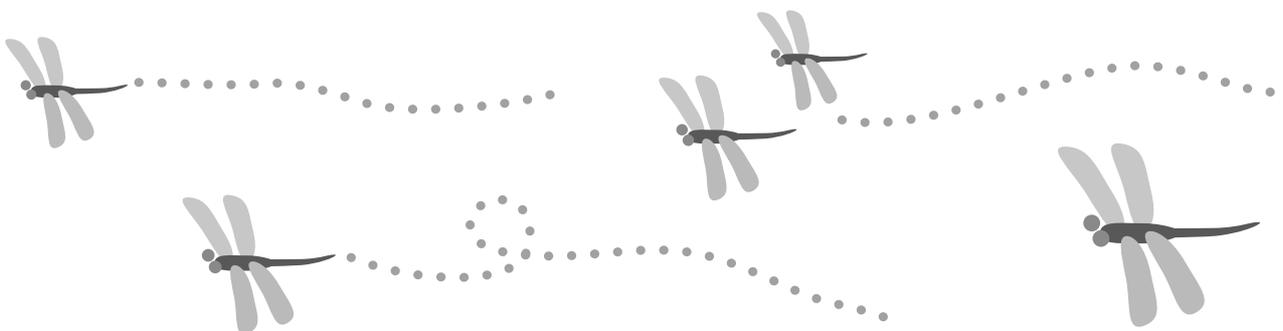
3年生以上の皆さんは「不確定性原理」という言葉を物理や量子力学で学んだと思いますが、これはアインシュタインたちとともに、近代物理学の発展に大きく貢献したベルナー・ハイゼンベルグの発見によるものです。ハイゼンベルグが20才の頃から70才にいたる約50年間に、20項目について対話形式でその時どのように考えていたかを忠実に綴った「部分と全体」という著書を、心に残る一冊として取り上げたいと思います。

ハイゼンベルグが 高校卒業資格試験を受験する前の数週間友人たちと徒歩旅行（テントを担いでキャンプしながら旅をする）の中で、高校で習った原子間の化学結合（いまの教科書にもある）に疑問を抱き、旅行中に歩きながら友達と議論を繰り返す。そのような若いときに、そのようなことを考えていたのかと思うと驚きである。この時代のドイツは第一次世界大戦に敗れ、ひどい経済状態、荒廃し、混乱した社会不安、ナチスの台頭、ヒットラーの出現という苦しい時代であった。

大学に進学した後、原子物理学の分野で短時間で次々と業績を挙げていく。研究を通じて面識のあったノーベル賞を受賞したばかりのボーアのもとで奨学金を得て研究をする。ボーアとともに、著名な物理学者、パウリ、ディラック、フェルミらと議論に議論を重ねて理論を構築していく過程や、ボーアとともに、考え方が違っていたアインシュタインやシュレディンガーとの長期間にわたる激論が、当時の言葉で展開されている。まるでドラマを見ているかのように、量子力学の発展が繰り広げられる。今まで教科書の中の理論や現象が単なる活字としてしか捉えられなかったものが、教室で直接教えられているかのように生き生きと見えてくるように思える。

この本は、科学の誕生と発展にいたる考える過程を綴っており、近代原子物理学とかなり隔たった所にいる人々にも示唆に富むものである。また、研究、教育、後継者の育成や原子力政策などにも言及しており、彼の研究に対する厳しさとともに、人間味あふれる優しさが随所にみられる。彼は常に細かい一つ一つの部分に全力を尽くしながらも、常に全体の見通しをもって進まねばならない、と考えていたようである。

なお、彼は終生統一場の理論の完成に集中するかたわら、奨学会の長として30年近くも国際交流に尽力し、その業績により世界各国から賞賛の言葉が寄せられていたのを忘れることができない。



「敦 煌」

井上 靖著

機械工学科 岩井 保善

私の読書タイムは、毎日の通勤電車の中の往復40分程度である。読書の時間としては少し短いかもしれないが、これが日常的となると年間を通して結構読めるものであり、また長く続いている理由かもしれない。しかし、期待はずれの本に出会うと、この片道20分が異常に長く感じられ、自分では通勤の時間的感覚からも今読んでいる本の興味の程度が判断できている。そんな中、もうずいぶん前のことになるが、つい夢中になって何回も乗り越しそうになったものに「敦煌」(井上靖著)がある。敦煌は中国・甘肅省の最西端に位置し、支那と西域ひいては中央アジアから陸路でヨーロッパを繋ぐ、いわゆる古代シルクロードの起点として有名な都市であり、特に市内の鳴沙山東端の断崖にある莫高窟は4世紀から1000年間にわたって造営された“砂漠の画廊”で無数の壁画と彩色像がある。そして1900年に1窟の壁の中に石窟があるのが発見され、大量の仏教経典や古文書等の文化財が出土し、20世紀における文化史上最大の発見の一つとして注目を浴びたことは周知の通りである。

小説「敦煌」は、井上 靖氏の西域物といわれる歴史小説の代表作の一つであり、西夏軍によるこの都市国家の没落までを描いたもので、官吏任用試験に失敗した主人公が開封という町で西夏の一人の女性を救うことから始まり、そのときに彼女が差し出した一枚の小さな布切れに記されていた異様な形の文字、すなわち西夏文字がこの小説における主人公の運命を変えていくことになる。またこの小説では、いつ誰がどのような事情で先に述べた石窟を造ったのか、そして、なぜ大量の書画や経巻をここに埋めたのか、いまだに決定的な定説がない中、作者がこの謎に迫っているのが興味深い。

歴史小説の面白さは、単にスケールの大きさや奥行きの高さだけではなく、この作品でもそうであるように、半ば史実に基づいていることによる壮大なロマンと感動をいつも読者に与えてくれることにあると思う。私も、いつかは必ずこの敦煌を訪れ、自分なりにその歴史に迫りたいと思っている。学生諸君も、この秋の夜長を歴史小説に親しんではいかがでしょうか。

ところで、通勤電車内のことに戻るが、最近は本当に若者の電車内での読書風景が見られなくなった。本を開いているのは男女問わず殆ど中高年だけである。理由は言うまでもなく、ケータイである。今若い人は、車内では本に変わってケータイと向き合っているのである。こんなところからも読書離れが危惧されるところであるが、せめて本校の学生諸君には右手にはケータイを持っていても、左のポケットにはいつも文庫本を忍ばせていて欲しいと願っている。

●●● 2002年 ●●●

今年はこんな年です。

樋口一葉生誕130年、竹下夢二生誕120年、小林秀雄、横溝正史、正岡子規、壺井 栄、住井すえ共に生誕100年、ブルース・リー生誕60年（ということは60才？）三島由紀夫没後30年、石原裕次郎没後15年、松本清張没後10年、故人のゆかりの地や生誕地などでは、いろんなイベントや記念出版がなされているようです。図書館でも記念出版本を数冊購入しました。

学生の広場

暗闇のなかで

機械制御工学専攻 高松 健太郎

パリのルーブル博物館には次の事が書かれています。

there be light !

直訳すると「光あれ」という意味です。旧約聖書で神様が世界をつくるために一番最初に言った言葉でした。実はこの言葉、裏にもうひとつ意味があるのです。

本を読まないというのはどう言う事でしょうか？それは暗闇にいるのと同じ事です。無知という暗闇です。ドイツの文学者ゲーテは次のような事を言いました。

三千年を解くすべを持たぬものはその日その日を暗闇の中で、あいまいなまますごす。おや、ここでも暗闇 (dark) という言葉がでてきました。人は本を読み、知識を見につけることで無知という暗闇から抜け出す事ができます。子供の頃、みなさんはこの世界がどういうものであるか考え、不安に思った事はありますか？

「there be light」

言わんとしている事は「たくさん本を読んで、たくさんの事を知りなさい。そうすればあなたは幸せになることができます」

まあ、拡張解釈ですけど...この世の中にいろいろな人がいます。スポーツが好きな人もいれば切手のコレクションが好きな人もいます。日々の発見を生きがいとしている人もいれば家族と過ごす時間を生きがいとしている人もいます。平和を愛する人もいれば、戦いの中でしか自己を発見できない人もいます。そういった人々に共通の欲求のようなものはあると思いますか。

あるとおもいます。知りたいという欲求です。それは人間として根底にある最も強い部分です。

どうかたくさん本を読んでください。悪い本も良い本もきちっとした判断基準があればあなたの心強い味方になってくれるはずです。

ここは変だよ奈良高専の図書館

5 M ケネディ

図書館は勉学において非常に重要な施設であることは言うまでもない。図書館の積極的な利用は、授業への積極的な参加と並んで、学習の成果に直接繋がる。私は図書館をよく利用する。調べたいものがあるときだけじゃなくて、面白い本を読みたいときとか、リラックスしながら新聞か雑誌を読みたい時などよく図書館に行く。この習慣が身に付いたのは高校時代だった。私は高校を出て日本にきたわけだが、出身高校には大きな図書館があった。大きいと言えば誤解を招きやすいが、具体的に言えば、建物だけがなくて、図書数は本校の図書館に比べれば少ない。それに当時はコンピュータが一台しかなく、しかもインターネット専用なので本探しとかは自力でやっていた。インターネットの利用には予約が必要だった。それでも図書館を便利にするためにいろいろな努力がされていた。本探しを容易にするために本を綺麗にアルファベット順に、かつ科目別に並べていた。快適な勉強環境作りのため、いろいろなやぶってはいけない厳しいルールがあった。まずは騒音の禁止。図書館内ではしゃべったりすることは固く禁じられていて、「No Noise Please」と書いた看板が館内のあちこちにおいてあった。そのため図書館はたいてい静かで、大声で自由にしゃべっている姿をよく見かける本校の図書館に比べて勉強に集中できる静かな環境のある図書館だった。もちろん休憩室が設けられていて、そこで気晴らししたり、自由に友達としゃべったり、ディスカッションしたりすることができる。本校の図書館は様々な分野の資料が備えられ、設備も完備されているので大いに快適である。本の検査もコンピュータの利用によって安易に出来るし、音楽を聴いたり、映画を見たりすることもできる。しかし本校図書館の図書（雑誌を除く）の

大多数は古く、それらの内容は瞬く間に変わっている現代の科学にはもう当てはまらないのではないか。また参考書のほとんどは一冊単位でしかなく、それに貸し出し中の状態にあるものが多く、使いたい時に手に入れられないというのが現状であろう。やはり重要な参考書は二冊以上あったほうが便利だろう。経済的な制限もあるが、できれば英語の技術雑誌も取り入れてもらいたい。もっと快適な勉強の環境作りを営もう。

留学生活を通して得たこと

5 M リハン

私は日本で留学生活をはじめ今年で3年になります。今まで日本で留学生活を過ごして本当に素晴らしい経験ができたと確信しています。この3年間の留学生活を通して日本の文化やいろんな習慣などを少しずつ理解することができました。また、大切な友達もたくさんできました、私の留学生活にとって友達は欠かせないものです。留学生交歓会を通して現地の友達だけではなく様々な国籍の留学生の友達と出会うことができ、今では世界中に友達の輪が広がっています。前よりももっと視野を広げることができました。このことは非常に大きな収穫です。そして世界的に物事見られるようになったと思います。

私は初めて日本に来て日本語能力に少し不安を感じていましたが、この数年の留学生活で気持ちもだんだんなくなってきました。日本での留学生活は私にとってとても重要なことになりました。得た経験や感じ取ったこと、見たものはこれから私の人生にとって大いにプラスになっていくと思います

ブック・ハンティングに参加して

1 M 八木 賢大

先日、図書委員でもなくまして図書館を誰よりも多く使っていることもない自分が、図書委員の仕事を知るとい建前で図書選び（ブック・ハンティング）に参加させて頂きました。やはり田舎と違い数多くの種類の参考書や英語の本などが置いてあり、当然欲しいと思う本が出てきます。そこで僕は、図々しいと分かっているながらもついつい図書委員の人に頼んでしまいました。こうしてブック・ハンティングを終えた時にはけっこう時間が過ぎていたのにはびっくりしました。これほどまでに本は自分に楽しく、また有効な時を与えてくれるものだと改めて知り、前よりももっと本に興味をもてるようになりました。

今後もっと多くの機会に図書館を利用したいと思います。

.....

1 M 渡辺 裕文

初めてブック・ハンティングに行きました。学習の本などいろいろな種類の本の中から必要なものを選んで買うのはとても楽しく、自分の欲しいと思う本を購入できてとても良かったです。それに図書委員でなくても行けるしとても得です。今回のブック・ハンティングでもいろいろ新しく購入したので、図書館にすれば自分のみたい本が見つかるかも知れません。図書館へ足を運んでみてはどうでしょうか。

.....

2 C 上辻 広

先日行われたブック・ハンティングで日々の勉強に役立つ各教科の参考書や、一般の小説などを購入しました。参考書ではチャート式などの解答、解説が詳しいものを選んで購入しました。小説はこの間のアンケートの希望図書の中

心に購入しました。また英検や漢検などの資格をとるのに必要な問題集、参考書なども購入し、さらに図書館が充実したと思います。図書館には何万冊もの本がありますが、常に新しい情報を取り入れるためにブック・ハンティングは必要なことだと思います。最近では情報を得るだけならインターネットのほうが便利で簡単ですが、僕は本を読むことでこそ得られるものがあると思います。

いつも図書館を利用している人も、あまり図書館を訪れない人も、この夏に読書感想文を書かなければいけない人も、図書館に行ってみることをお勧めします。

.....

2C 竹内 健一

今回、図書委員でもないのにブック・ハンティングに参加させてもらって、おこがましくも思うのですが、折角の機会なので楽しませて頂きました。調べ物に、退屈しのぎに、果てはちょっとした避暑地として、多くの人に利用されている図書館ですが、その蔵書は充分とは言えません。又日ごと出版されている書籍を考えると、充分には成り得ないと言えます。その大量の出版物の中から取捨選択して、図書館に並べるのは容易ではないし、必ずしも皆が読みたい本が並ぶわけでもありません。利用者が必要とする書籍を確実に購入する為にクラスに1人の図書委員が決められており、ブック・ハンティングという催しが予定されるわけです。それらが有意義なものとなる様に、学校全体での図書館利用が増えていけば素晴らしい事だと思います。



シリーズ本紹介

2I 中野 晃司

『新・フォーチュン・クエストL (リミテッド)』

その日、パーティに1通の手紙がやってきた。

自慢ではないが貧乏パーティである。パステルもノルもキットンといったパーティの面々が興味津々に見る中、手紙を見るが、それには開け口どころか差出人の名前すらなかった。みんなが疑問符を浮かべる中、盗賊のトラップがハサミを入れると・・・「ぼんっ！」小気味がいい音がしながら『手紙の中のトラップ』が発動。幸いにも危険な罠ではなかったが被害を受けたトラップは激怒。絶対に謝罪金を払わせるといきり立ちながら、中からいっしょに出てきた『トラップハウス』の挑戦状を受けることに。

しかし、そこで行われた『ゲーム』は何故か本当の『トラップ』に！

このお話は本編『フォーチュン』シリーズの番外編なので、本編を読んでからのほうがいっそう楽しいかもしれませんのでよろしくお願ひします。(宣伝)

『新・僕らの悪魔教師』

他人に関心が無くなっている子供たち。子供たちはそれぞれに好きなことばかりをしている。お金がほしいなら、馬鹿な大人相手に援助交際をするものもいる。嫌いなやつがいたらガキ大将はそいつをパシリに使って金を集めようとする。今の子供には増えている。

この話に登場するクラスも例外なくそれに属し、遂に『先生が』登校拒否。しかし、子供たちがした報復はこの後に待っていた。新任してきた教師は噂を集めるのが得意なものでも分からないように校長が情報を完全に遮断！ただ事ではないと警戒していた生徒たちの前に現れた新担任、菊地英治。彼は生徒たちが想像していた以上に上手い手を使い子供たちを扱う。その姿はまさしく菊池が子供たちに言ったものだった。

「俺はお前たちの為に悪魔になる」子供ならではの手法と、チームワークで悪い大人たちを懲らしめてきた、「ぼくらの」シリーズの続編。前作の主人公、菊池の陰湿な悪魔教師の真相とは・・・

図書館をもっと利用しやすく、快適にするために！

私たちはこう考えます ～アンケート調査より～

学生会図書委員会が中心になって行った図書館に関するアンケート調査結果をまとめてみました。回答者は、総数の3分の1の374名と少な目ですが、学生諸君の意見をほぼ包括していると思われますので、この結果を図書委員会でよく検討して、改善に努めたいと考えています。

アンケートに答えた殆どの人が積極的に利用したい、必要な時に利用したいと回答していますが、それほど利用したくないという人が6%もいることが分かりました。そんな人を図書館に惹きつけるにはどうすればいいか？を考えながら、結果をみてみましょう。

要望の多いものから

館内の要望については

1. 蔵書の充実 (95)

古い本が多いので、最新の本を入れて欲しい。雑誌を増やして欲しい、など。

2. 本を探しやすく (33)

・本の案内図、置き場所を分かりやすくする。整理・分類を細かくする。本の並びを今に加えて年代順などに並べて欲しい。本の案内をする。毎月テーマを決めて本の紹介をする、など。

3. 貸出、返却の方法をもっと便利に

と続きました。この中には、時間延長(16)、貸出冊数の増加、鞆の持ち込み(18)などが含まれています。

次に、**施設面**では

1. 図書館をもっと大きく (78)

座席数を増やす

鞆置き場をもっと広く

書架の間隔が狭い

2. 出入り口を1階に (53)

3. 空調をもっと利かす (35)

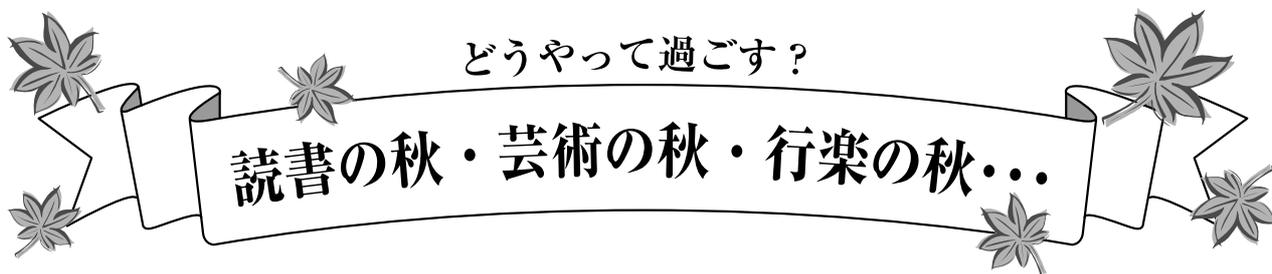
4. 図書館と校舎の接続を（屋根付き廊下など）をもっと考えて欲しい

など、の要望が出されました。

又、昨年みんなを驚かせた図書館の壁色については、殆どの人(175)が、良くないと答えています。いいとは思わないが、このままでよい（その費用で本を買えばよい）(88)と思っている人も多く、納得。

その他にも意見や要望がたくさんありました。紙面の都合上主立ったものを以下に記載します。

- 館内がうるさいのもっと静かに (18)
- インターネットを借りる時いちいちいうのは嫌である
- 禁帯出になっている本をできるだけ貸し出して欲しい（数値データの本）
- 返却延滞者の情報がわかるようにして欲しい
- 館内での飲食をOKにして欲しい (10)
- 館内にコピー機を導入 (4)
- イベントを行うなど広報活動を積極的にする
- 他の利用し易いといわれている図書館を参考にすればよい
- 勉強の息抜きにも利用できるようにする
- コンピュータやAV機器を増やす (5)
- 情報機器の更新
- 個室の様なのが欲しい (5)
- 夜間窓側の机や入り口が暗いので明るく (4)
- センサーのが反応が時々誤作動するのは困る
- 自習室、飲食室、仮眠室などを設ける。
- ソファや植物などをもっと置く
- トイレをもっときれいに
- 便利な場所に移転、等でした。



どうやって過ごす？

読書の秋・芸術の秋・行楽の秋...

秋たけなわです。天は高く、空は高く空気は澄み、夜は長い・・・この秋あなたは、燈火に親しむ？正倉院展や音楽会、映画会など芸術や文化に触れる？それとも友達を誘って旅に出る？あなたの秋を、紅葉した里山に負けないくらいいろいろなカラーで染め上げましょう。

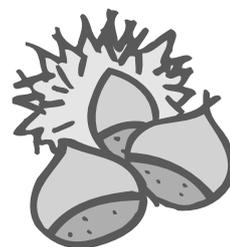
“燈火に親しむ派”のために

図書委員会では今年の秋の読書週間行事として、「今年の秋は ミステリ＝謎＝？」とするテーマで、いろんなミステリに迫ってみました。世界は謎に満ちています。

さあ、ミステリの世界に旅立ちましょう。

“文化や芸術に触れる派”のために

- プリンセスダイアナ展（大阪）、●華麗な紙のドレス展（大阪）
 - 大レンブラント展（11/3～1/13京都国立博物館）
 - 一遍聖絵 絵巻をあじわう（11/26～12/23奈良国立博物館東新館）
 - 知られざる奈良の至宝（11/26～12/23奈良国立博物館西新館）
 - 世界の大風呂敷展（10/3～12/23国立民族学博物館）
 - ミロ展 1918～1945（～12/1 愛知県美術館）
 - 韓国の色と光（11/24～12/23 大阪ATCミュージアム）
- などに出かけませんか。



回想 子規・漱石 高浜虚子著 岩波書店

歌人・俳人として日本史に優れた足跡を残した正岡子規没が亡くなって100年。没後100年記念として「仰臥漫録」や歌集「竹之里歌」などが限定復刻されたりしています。子規を知るには、これらを読むのが一番でしょうが、私はあえてこの本を選びました。著者である虚子が若き日に会った、二人の希有な巨人との交流を綴る、回想録です。正岡子規と夏目漱石の友情はよく知られていますが、漱石を作家ならしめたのは、実はこの高浜虚子なのです。明治末こんなに素晴らしい友情が存在していたなんて…

おしゃべり心理学 小西聖子著 白水社

「週刊朝日」に連載されたエッセイをまとめたもの。著者は犯罪被害者救済の第一人者で精神科女医。本人はとてもシャイ（のつもり）で謙遜していますが、自分自身を引き合いに出しながら、上手にストレスの対処法やヒントを与えてくれます。老若に関わらず、人生はストレスだらけです。文学者のエッセイとはひと味違った視点で書かれた、癒し系のエッセイとでもいいでしょうか…。それぞれのタイトルを心理学的且つ精神医学的に展開していく力量は凄い。しかも面白い。とても得した気分になれますよ。

私はだれ？ 自分さがしのヒント

キャサリン・パターソン著

中村妙子訳

晶文社

友だちや家族とトラブルがあったとき、親しい人が死んだとき、つらい戦争や、災害のニュースを耳にしたとき、人はだれでも、どうしようもない悩みを抱えてしまうことが有ります。この本は、そんな人生が、問いかける最も難しい疑問に直面した子どものための「自分さがし」の旅の案内書です。

読書のたのしみ

岩波書店編集部

岩波書店

読書の楽しみ方は人それぞれです。25人の著名な学者・作家のユニークな読書の楽しみ方を覗いてみましょう。ここには載っていませんが、ノーベル賞作家の大江健三郎氏は人生で4回読みたい本を見つけようと、言っているそうです。「この忙しい時代、2度読むのも大変なのに4回もなんて…」と怒っているのは誰ですか？この秋、せめて「もう一度読みたい」本を見つける旅に出かけましょう。

読書力

斎藤 孝著

岩波書店

3年ほど前、“老人力”という奇妙なタイトルの本がベストセラーになったことがありましたね。物好きな私が手にとったのは言うまでもありませんが…ちょっと期待はずれでした。同じ「力」でも今回の“読書力”はなかなか力が入っています。読書を習慣化するためにはどうすればよいのか。著者は自己形成のため、自分を鍛えるため、自分を広げるため、とあえて簡単に3つの項目に分けて読書することの意味を分析します。読書することによって培われるコミュニケーションの力、人間を理解する力、それが正に「読書力」だというわけです。そんな本絶対読みたくないわ、という天の邪鬼（あまのじゃく）な人も、巻末の文庫百選「読書力」おすすめブックリストだけはぜひ目を通して下さい。最近その著書「声に出して読みたい日本語」①②で超有名人？になった斎藤先生の人気授業を受けたい人は明治大学へどうぞ。

生き方上手

日野原重明著

ユーリーグ出版

全校集会で、教務主事・泉先生が紹介された本です。「いきいき」という中高年むけの雑誌に掲載されたものを纏めたものですが、どの年代の人にも読まれ、現在ベスト・セラーの上位にランクされています。著者は91才の現役医者です。昨今、職場をはじめ、地域、学校、家庭など人間関係の希薄化がますます進み、家庭崩壊、学級崩壊が当たり前の風潮になって来ています。昔を懐かしんでばかりいるわけではありませんが、どこかで歯止めをかけなければ…。



読書週間行事について

今年は横溝正史生誕100周年ということがきっかけとなり、本年度の読書週間行事のテーマを「ミステリ」として関連図書を展示しました。

ミステリ=謎=?とするなら、世の中ミステリだらけです。古代遺跡、歴史上のミステリ、宇宙の謎からはじまり、身近な不思議は数え上げたら、きりがありません。

人は皆ミステリを抱えています。研究のこと、勉学のこと、家族のこと、友人や異性にだって。日頃使っているコンピュータだってプログラムのバグなどわからないこともたくさんあります。

「ミステリ」は小説だけのものではありません。

でも、「ミステリ小説は面白い！」さらに「他人のミステリはなお面白い！」読書週間をきっかけにこの秋はミステリの世界に旅立ってみませんか。

ちなみに、今年の第56回読書週間（読書推進運動協議会主催）の標語は「自分が変わる、世界が変わる、本との出会い」です。さて、変身できるかな？



編集後記

高専祭などでキャンパスが一番にぎやかになる秋。みなさんの秋一番の楽しみは何でしょうか。それぞれの楽しみに加えて、秋の夜長は読書をたのしみましょう。読みたい本が見つからない、という人は図書館にきて書架の間をゆっくりさまよって下さい。卒業生の洞田貫さんが前号の図書館だよりに書いてくれました。きっと、本があなたを呼んでくれるって。

特別寄稿くださった、角先生をはじめ、お忙しい中ご協力下さった皆様に深く感謝します。

(図書館委員会)

奈良工業高等専門学校図書館 〒639-1080 大和郡山市矢田町22 TEL 0743-55-6015

URL <http://library.nara-k.ac.jp>